

武蔵野日曜聖書講筵

汝は我が避所

――詩篇第61篇――

1985年1月13日

小池辰雄

極限状況 絶対次元の世界 避所 自分の心の中 無心 出我入主 汝の翼の蔭 下降の神
わが嗣業 不可能即可能

【詩篇61】

琴にあわせて伶長にうたわしめたるダビデのうた

1 ああ神よねがわくはわが哭声をききたまえ、

わが祈りにみこころをとめたまえ。

2 わが心くずおるとき地のはてより汝をよぼん。

なんじ我をみちびきて

わが及びがたきほどの高き磐にのぼらせたまえ。

3 なんじはわが避所

われを仇よりのがれしむる堅固なる櫓なればなり。

4 われ永遠になんじの帷幄にすまわん。

我なんじの翼の下にのがれん。

5 神よなんじはわがもろもろの誓いをきき、

名をおさるるものにたもう嗣業をわれにあたえたまえり。

6 なんじは王の生命をのぼし、

その年を幾代にもいたらせたまわん。

7 王はとこしえに神のみまえにとどまらん。

ねがわくは仁慈と真実とをそなえて彼をまもりたまえ。

8 さらに我とこしえに名をほめうたいて

日ごとにわがもろもろの誓をつぐのい果たさん。

●極限状況

詩篇61篇は私の『詩篇珠玉集』（小池辰雄著作集第四巻）の中には入っていません。この次の『旧約拔粹』の中にはこれも入れたいと思ってます（注：当初予定の『旧約拔粹』と『新約拔粹』は後に第十巻『聖書は大ドラマである』に変更された）。皆さんには、新しい詩篇です。非常に



短い詩篇で二つの部分から成っています。最初の部分は5節まで、あとは6節から8節まで。

「ああ神よねがわくはわが^{なくこえ}哭声をききたまえ、

わが祈りにみこころをとめたまえ。」

詩はよく対句になっていまして、ここでは「哭声」と「祈」というのが同義語的に使っている。哭くというのは、この場合は非常に^{じょうく}慟哭するような深い泣きです。それが祈りであるという。

「赤子の泣くのもまた祈りである」

というような言葉が内村先生の言葉の中にもありましたが。

我々は結局、相対的な自分自身ではどうにもならない。それは精神的にも肉体的にもそうです。これは深刻な涙を持っている。それがこの泣く声となるわけです。それが祈りである。私は「祈りの宗教哲学」というのを『無の神学』に書きました。あれはやはり二十代の頃に書いた。

「人間は非常に寂しさの中で深く求めている。生命を求めている。その生命を求めている全存在的な求めが祈りだ」

ということから書きはじまっています。

要するに、我々はみんな相対的には滅びざるを得ない。ところが、神さまはこれを滅びへと造ったのではない。生命へと造られた。その生命へと造られた我々は生命の根源を求めないでは、滅びに行くわけです。ところが、一般に生命の根源を求めている。実は生命を根源的には求めている存在でありながら、求めていない。これが一般の人の在り方です。そして、葬式なんてことになると、仏さんだの神道だの何だのという、宗教の人に頼んで祈ってもらっている。それでは本当はしょうがない。毎日の平常の生活において根源を忘れてしまっている。エレミヤも、

「たまり水ではダメなんだ。本当の泉を求めろ」

と言っています。いろいろなことにでつくわすと、気がついたようになって、神さまの方に向かっていく。そうではなくて、実は誰でもが極限状況なんです。極限状況であるので、本当の絶対的なものを求めないではいられない。

また、絶対的なものは、神さまは、私たちを実は向こうから求めておられる。

「求めよ、さらば与えられん」

というが、

「私はお前たちを求めているんだ」

という、上からの引力があるわけです。この引力に引き上げられる。地球はまん中に引力があるから、物を上へあげれば落ちるけれども、魂の世界は、神さまという霊極が、魂の極がありまして、そこへ吸い上げようとしていらっしゃるわけです。だから、我々の肉体は地の極に落ちていくようだけれども、魂は上の方に向かっていく。そういう矛盾的な構造になっているようですけれども。



●絶対次元の世界

実は肉体も魂も一つであって、これは霊肉渾然として本当のところへ引き上げられていく。この詩篇にそのことが書いてある。

²わが心くずおるとき地の²はてより汝をよばん。

なんじ我をみちびきて

わが及びがたきほどの高き磐^{いわ}にのぼらせたまえ。

「なんじ我をみちびきてわが及びがたきほどの高き磐^{いわ}にのぼらせたまえ」

という句です。私はこれを読んでいて非常に驚いた。自分たちが登れないような高い磐の上へ登らせてくれというのは、

「絶対次元の世界に入れてくれ」

ということです。

「私たちを絶対次元の世界に入れてください」

と。その絶対次元の世界は、詩的な表現ではそういうことになる。「高き磐」という。これはイスラエルへ行けば、大きな高い磐がありますから、そういうところから来ている句です。詩というものは、具体的なものを通して永遠的なものを、不滅なものを表現する。観念的な表現ではないから。具体的表現において何が言われんとしているかということを描まえないと、詩のこころは分からない。

「及びがたきほどの高き」ところに、富士山のとっぺんに連れて行ってくれというようなわけだ。雲が足下にあるようなところ。それは相対的な次元を乗り越えた、どんなことがあってもその相対的なものに左右されないとところへと。我々は地上にある限り、生活において常に相対的なものによっていろいろにされている。運命環境がある。それは雲みたいな現実ですよ。しかしながら、雲の中にいながら、波の中にいながら、波を突き破り、雲を突き破って行くような、そういうのが、この

「及びがたきほどのいと高き磐」

ということですよ。

そういう絶対次元は実はこの相対次元の中にあるんです。我々は、この相対的な肉体もいろいろになったり、精神的にもいろいろになったりするけれども、しかし、そういった自分の側の相対性に、その波や風や雲に揺られない、いや、そんなものが来れば来るほど逆に、いよいよその絶対性の素晴らしさを身につけているというところに入らないとね。そこに入ると、今度は自分が相対界を支配していきますから。そうすると、肉体的にもそれが治ったりする。精神的にも逆に強められていく。これが本当の信仰の世界なんです。

●避所

それを今度は別な言葉でこの詩篇では、



3 なんじはわが避所

われを仇^{あた}よりのがれしむる堅固なる櫓^{やぐら}なればなり。

と。避け所であり櫓である。城である。この「避け所」という言葉は詩篇の方々に出ています。62篇8節にも、

「神はわれらの避所なり」

と出ている。

「8 民よいかなる時にも神によりたのめ。その前^{みまえ}になんじらの心をそそぎいだせ。神はわれらの避所なり」(詩篇62・8)

この8節も素晴らしい句です。我々にとつては、具体的にはキリストが神です。旧約ではまだキリストは出てきませんから、預言の内容になっているけれども、新約ではもう預言ではなくて、現実の内容になっている。

「聖書は我につきて証するなり」

という。創世記から黙示録まで中心になっているのは、聖書というドラマの中心は、主人公はキリストです。著者が神です。

このキリストという避け所――避け所はキリストです――ここへ、何でもいいから入ってしまふ。これが祈りです。だから、祈り入るといふ。私がいつも「祈り入る」というのは、

「キリストの中に入らなければ、祈り入るにならない」

というわけです。キリストは、「父よ」と言うときに、父の中に入ってしまったている。「父よ」と叫ぶと同時に、自分の全存在が入っていく。これが本当の祈りなんです。あなた方は、祈るときに、その現実に入らなかったら、いつまでもこっち側だったら、祈りは力にならない。

「信仰、」

の仰の字は要らないんだ。

「信交、」

です。信じ交わらなければダメです、中に入らなければ。これはもう絶対です。私は体験から申し上げている。祈り入ることです。

こういう祈り入る祈りを、私は無教会時代には知らなかった。内村鑑三、藤井武、塚本虎二は――一流の先生方ですよ――そこまではつきりと仰らない。いつも、「信頼」と言っていた。信頼という言葉はやっぱり距離がある。先生方の時代はそれでいい。それぞれの使命があつたから。

「君たちはそれを先に進めよ」

と、内村鑑三、藤井武、塚本虎二は天界でそう言っていらいっしやるに相違ない。それを、いつまでたつても、足踏みしていたらしょうがないですよ。だから、私はどんなにみんなに悪口を言われても仕方がない。



「使徒たちの信仰の現実に戻れ。原始福音の中に帰って行け。キリストの直弟子になれ。キリスト直結だぞ」

ということですよ。そうすると、本当に力が来るからしょうがないではないですか。事実が証明する。

だから、このキリストという避け所の中に入る。

「汝はわが避け所なり」

と。キリストの中に自分を入れる。それはもう、祈りの中でグッと自分を投げ入れる、この呼吸をつかまなかったらね。つかまえたら、今日一日でもって、10年信仰したよりか先へ行ってしまう。それくらいの世界ですから。

「後なる者は先に」

とキリストは言われた。

キリストという避け所です。キリストは死人までも甦えらせるような驚くべき方です。癩病人は癒され、跛者は立ち、盲人は目が開き、聾者は耳が聞こえ、イザヤ35章で言っていることが、キリストは全部これを現実にしてしまった。それはやがて来る新天新地の予表として、福音はそこに展開された。それを文句なしに受けとらなければダメです。魂の世界はごまかしがききませんからね、いい加減なことではどうにもならん。キリストの中に自分を本当に投げ入れる。そうしたらもう――私はすぐ異言が出そうになって困るんだけれども――キリストと一如の世界です。

●自分の心の中

このごろよく、「禅宗、禅宗」と言っている。まあ、禅宗の善さもありますよね。たとえば、えしんそうず恵心僧都（源信）の言葉にも、

「よもすがら仏の道を求むれば

己が心にたずね入りぬる」

とある。「よもすがら仏の道を求むれば」――夜半中、仏の道を求めて坐禅を組んでいたんだらうね――「己が心にたずね入りぬる」という。結局、自分の心の中だった。

「本当の世界はただ自分の心だった」

というんです。栄西も、

「ああ、大いなるかな、心や」

と言っている。「心」と言ったって、「魂」と言ったっていい。要するに、禅宗の世界では、自分の本当の性――

けんじょう「見性」

という――心の世界、曇りなき心の世界に悟り入る、そこが禅宗の世界ですから。それはいいですよ、それも一つの真理だから。やりたければ、禅宗で結構です。



そこも一つの真理だが、キリストにおいては、神という絶対者の中に自分を本当に入れたら、彼自身が絶対的な高所の中に入ってしまった。そうして、悟りどころのさわぎではない、もの凄い創造的な力になる。それで、さっき言ったようなぐあいには、すべての人がキリストによって救われていく。精神的にも肉体的にも。私は仏教の真理も真理としてはもちろん尊びますけれども、やはり次元的には、このキリストの世界がもう最高というか、絶対と言いたい。聖道門は大変ですから、そこまでは非常に修行がいる。ところが、この福音の世界はひとつも修行は要らない。あるがまま投げ入れればいいんだから。蛍光灯なんかやめて、外へ出て行って太陽の光を浴びるのと同じことです。太陽の光をもろに浴びてしまう。そういう非常に簡単な具体的なもの。それが福音の素晴らしきなんです。

●無心

だから、

「我によらずば父の御許に行けない」

とキリストが言われたのはそのことなんです。その「我」というキリストは自分を何者としなかったでしょ。心もないような、それは無心というんだ。キリストの世界は無心の世界なんだ。非常に逆説的なものの言い方を私は今しているけれども。心もない無心の世界に入ると――無心という言葉は別な意味で非常に素晴らしい言葉ですけども――そうすると、本当の心の世界に、神の心の世界に入ってきます。仏教でいうと、もちろんこの心とは仏心なんだよ、見性の性の字は。仏を求めてみたら最後は心につかったというのは、それは仏心につかったことなんです。

仏の世界は西方浄土にあるのではない。「来た道さがせみんな身であり」という。

「仏道は東にもなく西になし」

来た道さがせみんな身であり」

という。みんな身の中にある。キリストは、

「天国は汝らのうちにあり」

と言う。みんなこれは同じ消息を言っている。「天国は汝らのうちにあり」というのは、

「私を本当に受けとってみろ。そこに天国があるぞ。神の国は近づきたり。さあ、入って来い」

ということですよ。そういうことですから、キリストという避け所です。避け所はもう、この祈入という一つ。

「祈入」

という文字だけ。これは祈り入る祈入、あるいは帰り入る

「帰入」

でもいい。全存在で帰って行くから、帰入です。祈入は帰入でもある。祈り入る、帰り入る。



キリストの中に自分を投げ入れていくと、賜りたる無限の力が来ますから。「堅固なる櫓」というのはそういうことです。「及びがたきほどのいと高き」ところというのはそうなんです。高きところであるし、いと低きところ、どん底のところでもある。谷底と山の峰とは同じことなんです。

●出我入主

私は今もの凄い詩にとりかかっていますが、楽しくてしょうがない。もう烈々、炎の如しです。いいですか、絶対に負けてはいかんですよ。負けていかんというのは、力むのではない。力むのでも、頑張るのでもない。この避け所に入って、そこから出てきてごらん。避け所に入ることは、

「出我」

我より出ることです。我より出て、出我しなければ。いや、避け所に入ると、出我と言ってもいいくらいです。自分を投げ入れると、いわゆる我から出てしまっている。キリストの中に入ってしまう。

「入主」

なんだ。主の中に入ってしまう。こんな言葉は今日初めて言う。主の中に入ってしまう。

「父と我とは一つなり」

とキリストは仰ったでしょ。

「キリストと私は一つである」

と。これははつきり言えなくてはダメです。

「まだ、そんなにはなりません。こっちはダメですから」

なんて。ダメだから入っていくのではないですか。何を言っているか。ダメだから入ると、一つになるんです。自分をダメでないなんて思ったら、入れない。いいですか。そういうことですから。

だからもう、普通の信仰とはおよそ違う。

「自分の信仰、信仰。信仰によって義とされる」

なんてね、冗談じゃない。もうしょうがないね、これは。キルケゴールよりもっと私は口が悪くなってきたようだ。楽しくてしょうがないから。楽しくて、楽でしょうがない。上から力が来るんだから、こんなありがたいことはないじゃないですか。

どうぞ、そういうように祈り入ってくださいよ。夜静かなとき――朝でも何でもいい――静かなときにただ一人で祈ることです。一対一です、キリストと一対一。これは寂しいところでない。楽しくてしょうがない。天の万軍が味方になってしまいうからね、パウロさん、ヨハネさん、ペテロさんが。そういうことになったら、今度はそこから、キリストは一切のものを持っているから、力も出るし、知恵も出るし、非常に創造的になる。ただ



「悟り」

なんて言つて、澄ましている世界ではない。禅宗は禅宗で結構ですが、もつと凄いのは、何といつてもこの福音なんです。

仏教の方で、

「仏法僧」

というね。「仏」は、非常に魂の目覚めた人のことをいう。「法」は、ただ法として知るのではない。法を生きなくてはいけない。「僧」というと、その如来とのやはり和合の世界が僧だ。仏法僧というのは素晴らしい言葉だ。福音的にもそれは言える言葉なんです。

● 汝の翼の蔭

4 われ永遠になんじの帷幄にすまわん。
とこしえ あげぼり

我なんじの翼の下にのがれん。

避け所を別な表現で言つたわけです。それは帷幄である。この「帷幄」というのは「幕屋」と同じ字で、もともと「オーホール」という字です。

「翼の下にのがれん」という。詩篇17篇8節に、

「8 願くはわれを瞳のごとくにまもり、汝のつばさの陰にかくし」(詩篇17・8)

とある。私を瞳の如くに――人間の目玉は非常に大事だからね――瞳の如くに守り、汝の翼の蔭に隠してくださいと。

「瞳の如く、翼の蔭に」

という。これも対句になっている。それから、詩篇36篇7節にも、

「7 神よなんじの仁慈はとうときかな、人の子はなんじの翼の蔭にさげどころ

を得、

ここにもちゃんと「避け所」という言葉が出ている。

8 なんじの屋のゆたかなるによりてことごとく飽くことをえん。
いへ

「父の家は住処多し」というキリストの言葉はこんなところから連関しているかも知れない。

なんじはその歡樂のかわの水をかれらに飲ましめたまわん。9 そはいのちの

泉はなんじに在り。われらはなんじの光によりて光をみん。」(詩篇36・7・9)

この9節は素晴らしい言葉だね。

「いのちの泉はなんじに在り。われらはなんじの光によりて光をみん」

と。あなたの光でなければ光を見ることがない。太陽の光も、あなたの光で見えるからというくらいなことだ。神さまの霊光です。

「翼の蔭に」という。

「親鳥が雛鳥を翼の蔭に置くように、私も何度エルサレムをそのようにしようと思つたけれども、一向に私の中にやって来なかった」



と、キリストが嘆いたでしょ。

「ああ、エルサレムよ、エルサレムよ」

というあれだよ。マタイ伝23章37節、

「『37ああエルサレム、エルサレム、預言者たちを殺し、遣わされたる人々を石にて撃つ者よ、牝鶏めんどりのその雛ひなを翼の下に集むることく、我なんじの子どもを集めんと為しせこと幾度いくたびぞや、然れど汝らは好まざりき。38視よ、汝らの家は廃すてられて汝らに遺のこらん。39われ汝らに告ぐ、「讀よむべきかな、主の名によりて来る者」と、汝等のいう時の至るまでは、今より我を見ざるべし』」（マタイ23・37〜39）

橄欖山からエルサレムの方をみて、キリストがこういうことを言われた。

「翼の陰、翼の下に」

とは、

「汝の愛の中に」

ということです。本当は、愛を求めているくせに、なぜやって来ないかというわけだ。動物も、植物も太陽の光を求めているんだ。愛であり、光であり、生命である。この三つの言葉は連関しています。

「リーベ（愛）、リヒト（光）、レーベン（生命）」

みんな「L」で始まっている。

「ラブ、ライト、ライフ」

特にヨハネ伝ではこの三つが非常に出てくる。キリストは、この愛であり、光であり、生命であり、またもの凄い知恵であり、義である。もう一切です。渾然たる人格ですから。霊的人物、御霊の人です。

こういうものを、何が私たちにくれるかというと、今言ったその「聖霊」なんです。聖霊は愛であり、光であり、生命なんです。だから、聖霊をいただくと、もう何も要らん。それがあらゆる働きをするから。お医者さんであろうと、建築家であろうと、何であろうと、みんな御霊の働きでもつていきますから。

それをただ

「信仰、信仰。信仰のみの信仰」

なんて言っているんだな。観念化してしまっている。だから、私は無教会から出たんです。

「小池というのは無教会だ」

なんて、まだ私のことを無教会なんて言っている。そうじゃない。冗談じゃない。

「幕屋」

と言いだしたのも、

「原始福音」



と言ったのもみんな私ですよ、言いだしつぺは。手島さんではない。これから12年かかって、でっかい詩を書いたら、もう文句なしですから。それまでは、何と言われても差し支えない。それだけの戦いを私はするため、やっているんだから。もう、

『エン・クリスト』（聖書伝道誌）

はみんなに書いてもらおうかな。よろしくお願いしますから。正直、打ち込みでしたら大変だ。そんなことを言ったって、書くけれどもね。

●下降の神

いいですか。こういう短い詩篇に本当に凝集しているんです。だから、非常に長い詩篇は私は取り扱わない。10節から、せいぜい20節でたくさんだね。

「翼の陰に、避け所に、幕屋の中に」

全部これは

「キリストの愛の中、生命の中、光の中に」

ということ。それは絶対次元でありまして、いと高きところであり、またどん底である。ゲートは、右と左のような両極を言ったけれども、私の両極は縦の両極だ。

「いと高きところに住めるものは、いと低きところまでやって来て、これが砕

けたる魂と一つになる」

というイザヤ書57章15節は忘れられない。

「¹⁵至高^{いと}至上なる永遠にすめるもの聖者^{せいじや}となづくるもの如此^{かく}いい給う、我はたかき所きよき所にすみ、亦こころ砕けてへりくだる者とともにすみ、謙^{へりく}だるものの霊をいかし、砕けたるものの心をいかす」（イザヤ57・15）

という、素晴らしい畳みかけた言葉ですね。下ってくるんだから、神さまは。下降の神だから。上から、降臨する。聖霊降臨、キリストの降誕、みんなこれは縦の関係でしょうが。下ってくる。はしごみたいになり下りする。だから、どん底と絶頂とは同じことなんです。そして、キリストはこのどん底の人たちを相手にして、これをみんな救い上げてしまう。いい加減なところにいるやつはどうでもいいと。極限状況です。

本当に自分がぶつつぶれていなければダメですよ。

「私はクリスチャンで、だいたい何十年信仰している」

なんて、何をぬかすかと。私は何もそんなことは考えてない。ゼロになっている私には、無限大がグーッと来るから。これは本当です。自分をサムシングと、何かと思っていいたらダメですよ。何もいらん。そうしたらもう、限りなく上からやって来る。それは祈入することです。

いや実に、キリストの方から本願の効力が入ってくる。ぶっ倒れていると、

「よーし」



と言ってキリストが入ってくる。だから、ぶっ倒れて、

「主さまー！」

と全存在で祈ってごらん。キリストが入ってきて治してしまうから。行き詰まりなんて知らん人になる、絶対に。

「今日は調子がわるい」

なんて、調子が悪かったら、キリストを入れる。最高の調子になってしまふから。相対的なことを考えて、どうのこうのはもう止めなさい。まあ、私みたいに、そう簡単に速く入れないかもしれないけれども。集会に来て、そういうものをビリビリ受けとって進んでください。

●わが嗣業

⁵ 神よなんじはわがもろもろの誓いをきき、

名をおさるるものにたもう嗣業をわれにあたえたまえり。

「わがもろもろの誓い」とある。「誓ってはいかん」とキリストは言われた。この場合の

「誓い」

というのは、「神さまと話し合って決めたこと」なんです。

「あなたとお話し合いをして決めたことを聞き」

ということ。この「誓い」と、今度は「嗣業」ときたでしょ。嗣業というのは、一番はつきりわかるのは、詩篇16篇5節です。素晴らしい詩篇です。これも『詩篇珠玉集』（小池辰雄著作集第四巻1980年刊）に書いてあります。ときどき、私の著作集を読んでくださいよ。無駄なことは書いてないはずですから。

「⁵ エホバはわが嗣業またわが酒杯にうくべき有なり。なんじはわが所領をま

もりたまわん。⁶ 準繩はわがために楽しき地におちたり。宜べわれはよき嗣

業をえたるかな。」（詩篇16・5・6）

神さまから賜うところの財です。ところが、「エホバはわが嗣業」と言うんですから、神さまが私の財だという。嗣業とは――親譲りというでしょ、あの譲りです――遺産です。神さまが嗣業なんです。私たちにとってはキリストが嗣業です。だから、

「名をおさるるものにたもう嗣業をわれにあたえたまえ」

という。

「神さま、あなた自身を、キリスト自身を、私は嗣業とします」

という言葉が詩篇16篇5節の大胆な言葉です。61篇ではそれほどの意味をもっていないけれども。

⁶ なんじは王の生命をのぼし、

その年を幾代にもいたらせたまわん。



今度は、王のために祈っている。これは、詩篇ではもちろん王様のことを言っているんだけど、私たちはここで、王の王を見ればいい。王の王はキリストなんだ。黙示録に出てくる。キリストは王の王である。

「ザ キング オブ キングズ」「もろもろの王の王」

である。天界の王者、霊界の王者ですから。「生命をのぼし」どころではない。キリストは生命を永遠に持っている。だから、ここにキリストをもつてくると、この相対的なことはみんないらなくなってしまう。

7王はとこしえに神のみまえにとどまらん。

とどまりますよ。

「言は神と共に、言は神なりき」

なんてヨハネ伝に書いてあるとおり。

「キリストという王者は、永遠に神の右に座したもう」

と、黙示録にあるとおりです。

ああいう表現をすると、普通の人は

「では、神というのは何か。キリストが右に坐ると言うが、一体、右とは何か」

と、そんなことを考えたら、全然、訳が分からない。霊界において右なんて言ったって、右も左もありはしない。ただ、こちら側からの表現として、相対的な現実の表現として、右だとか何とかと言っているだけのなしです。

霊界の神は見るできません。キリストが「父」と言っている「父」も、見ることはできない。見ることでできないものをキリストは「父」と言っているんだから仕方がない。お伽話的表现、神話的表现なんです。

「脱神話」なんていって、そういうものをみんな観念的に取り去ってしまったら、何もなくなってしまうよ。神話的表现でどういう霊的な事態を言っているかということを見なかったら、聖書はしょうがないですよ。

ねがわくは仁慈と真実とをそなえて彼をまもりたまえ。

ここでも「仁慈と真実」とある。これは「愛と信」です。「真実」という字は「信仰」と同じ字です。「アーメン」という字ですから。「ヘセッド」と「エメツ」と書いてある。「ヘセッド」は憐み、愛です。「エメツ」は、「アーメン」から「エメツ」という名詞になる。

実に、キリスト自身が「恵み(愛)と誠(信)」そのものです。「まこと」というのは、私たちが絶対に裏切らないということです、この「信」という字は。ただ精神的に「まこと」「真」なんていうのではない。こちらがどうであろうと、救いを全うする。それがキリストの本願の信なんです。だから、これは恵みと同じことです。



●不可能即可能

8さらば我としえに名をほめうたいて

日ごとにわがもろもろの誓をつぐのい果たさん。

あなたの力によつて、ということです。「御力による」と言つたつて、もうちゃんと自分の中に力が入つてしまつてゐる。だから、そのところを分割しないでもいいようなことになつてしまふんです。

「我何事をも為し能わず。故に、為し能う」

というわけです。これはカントと違ふんだ、私は。

「私はキリストがいなければ、何もできない。だから、できる」

と、こう言えるんです。「我何事をも為し能わず。故に、為し能う」と。これは非常に矛盾した言葉だけれども。おもしろいだろ。

「できないから、できる」

ということは、

「キリストがやつてくるから、できる」

ということ。

「ゼロ＝無限大」

「不可能即可能」

ということです。こんなことは今日初めて言う。私は自分の頭でものを言つてないから、非常に楽なんです。キリストが言わせてゐる。聖霊がやつて来て、言わせてゐるから。「できないから、できる」なんて。謎だよ、これは。「できないから、できる」とはどういうことか。あなた方なら答えられる。

そうかといつて、全然、勉強してないでだよ、ドイツ語ができないからできるなんて、そうはいかん（笑）。そういうことを言つてゐるのではない。

イギリスの国歌は6節あたりから来てゐるんだね。

「王の生命をのぼし」

なんて。新約の光で見ると、これがキリストになつてしまふし、もう全部これが、61篇はそのまま非常な福音です。力強い福音です。そうすると、

「ああ神よねがわくはわがなくこえ哭声をききたまえ、

わが祈りにみこころをとめたまえ。

というのが、完全に今度は、救われた祈りになつてしまふ。

「わが祈りを聞いてくださつた。私はもう歓喜に満ちています、喜びに満ちています」

ということになるわけです。

